

初代笠亭仙果年譜稿 — 補遺(上) —

石川了

初代笠亭仙果についての調査も、一応先回(本誌昭和五十七年三月十四号)を以て報告を終えたが、何分にも多作家で、また多方面に筆を執っているため、遺漏や未整理な点が少なくない。新たに知り得た、また御教示を得た資料等を以て補遺とする。使用した記号等は従来通りである。

文化元年 甲子 一歳

▲十月十七日 誕生

右の条にて仙果の別号及び蔵書印をまとめて記しておいたが、以下を追加する。別号としては、仙菓堂主人(『題作文稿』)、香果屋(『民農作稼益』)、風嶺陳李琳(『泥鵬台文集』)、合一堂主人(国会図書館蔵『同行百人一宿大土佐草』自筆本)、五峯老人、情痴漫郎(ともに『春の友鶴』)、情癡居士(『有情記事』)、雀賀楼主人、南生舎(ともに『成田屋評判寿海老』)、断峯山人、八太郎(ともに『乞児奇伝』)、琴亭三伝彦(『五人男銘々伝』)、柳々(『根源実紫』十二編等)、後修紫楼(『筆廻海四国聞書』十編等)などがあり、笠亭は「栗亭」とも記している(『国字水滸伝』十六編等)。また狂歌師としては倉皇庵、随意園の号がある(『よしなし言』六編)。蔵書印としては「補里亭所贈笠亭珍蔵記」(天理図書館蔵『大職冠』等)、「仙華山房蔵書」(国会図書館蔵『離屋

先生文抄』を追加できる。

文政四年 辛巳 十八歳

○春 「春興」の題にて一文を草す。

『よしなし言』三編(文政十一年執筆)に「今より七年もまへの事なるべし」として記されているので、逆算すれば本年ということになる。春の風情のおもしろさを述べたもの。

文政六年 癸未 二十歳

※九月十二日 鈴木朗、仙果宅にて歌会を開く。

水野清氏の御教示による。朗の『詠草』十八(「癸未歳」とある)に「玉古体九月十二日橋屋会」として朗の詠一首が見えている。橋屋は仙果の家号である。

文政七年 甲申 二十一歳

※閏八月又は九月 鈴木朗、仙果の需にて歌二首を詠む。

水野清氏の御教示による。朗の『詠草』十九(「文政七年甲申」とある)を見るに、「閏八月十五日常滑の白歌の七十の賀しける」と「松(九月)十三日亀三郎家会」の間に、「橋屋橋屋三郎需」として

「うつし多のたえてあらず八人の国見ぬ世の物をいかてしらまし
「うつし多ハあやしくもあるかうつしてハめなれし物もめつらかにして

とある。亀三郎は仙果の幼名と伝えられる名であるが、二十一歳で幼名というも不審である。

※九月十三日 鈴木朗、仙果の家にて歌会を開く。

水野清氏の御教示による。前条に引いた如く、朗は「松」を題にして二首詠んでいる。これ以後仙果の家での朗の歌会は開かれていないが、これは橘屋の経済状態と関係があるろう。

○是歳 昔話を題にして落話を作る。

『よしなし言』二編(文政十年執筆)によれば三年ばかり前のことであつたという。題「兎大手柄」「桃太郎」「花さきぢい」「したきりすゞめ」。

文政九年 丙戌 二十三歳

○四月下旬 雑著『おし花』初編一冊執筆。

小説演劇俳書等を抜書きしたものであるので、以下各編掲出ごとにそこに引かれている書名等を列挙する。

高力猿猴庵集録『名古屋年中行事』『女大楽宝開』『節用福寿往来』『世説新語補』『星鳩駱駝考』『音頭うかれ盃』『通俗西遊記』『撈海一得』『牛山方考』『寄園寄所寄』『清風瑣言』『煎茶仕用集』『当世女形気』『日本歳時記』『西湖佳話』『仮名世説』『林泉名所図会』

『おし花』二編一冊には年代の記載がないので、ここに引用書目を掲載しておく。

○秋 『小革籠』一冊を書写する。
『狂言記』『小児養育冊』『楊貴妃伝』『本朝神社考』『五雑俎』『風俗文選』『化粧伝』『張州府志』『西鶴俗つれく』

国会図書館蔵。奥に次の如くある。

昔々舌切雀がくれたりし、化物と宝物の、つゞらハ勸善懲悪を、教る手近い道具にて、なく音の千代の後までも、浦島が子の玉手箱、あいた口ふたがれぬ、かひなきはなしに事かハリ、世にありがたきつゞらとぞいふめる、それにもはるかま

さつたる、此小革籠といふものは、横井の君の御手細工にして、塩筒翁が目なしかたまならねど、不思議な徳を備たり、ひらいたる所は浅々として、よく見れば底ふかく、意味深長の男婦の教訓、やしなひがたき女子小人に、かみて含むる食物をいれ置て、いつまで過てもかひを生ぜぬ、奇特あるうへ、又旅行に携へてもちて道中の用意をこれにこめ置かば身に災難のかくることなく、るすの奥様娘御も心の糸の乱れたるや、はでなうハきををさめなば、あつはれ貞女淑婦といはれん、尤小うて持に安く明和時代のかたい道具、同じやうでも雑長持などの、めつたに手おもくもちほこひに不自由なるとは、同じからず、これを跋とす

文政九年戌の秋、窓下の燈をかゝける、古人を友とする夜、六拾年のしらぬむかしをあまた度したひて、かつはかやうなる戯ごとをしるす

患痔少年 笠亭仙果

文政十年 丁亥 二十四歳

○四月 「穢話」を草す。

『笠亭仙果文集』に「文政十年丁亥四月戲著」として掲載されている。鹽湊炊さん用水桶に排泄した人のことを漢文で記す。

○五月十三日 「小机記」を草す。

『笠亭仙果文集』に「丁亥五月十三日」として掲載。高橋家に出入りする職人長三郎が、仙果に机を与えた後、文政九年八月に四十歳に満たずして病死したことを漢文で記す。

▲是歳の十一月 榛園秋津(本居内遠)が茶番の会を開き、仙果も参加する(月不明)。

『よしなし言』二編による。参加者二十人ばかりで、花山亭笑馬が最も上手であつたという。仙果は三輪と栗田口をつとめる。またこのころ花山亭笑馬方にて「婦人づくし」、竜の屋方にて「他物尽し」「黄金づくし」などの茶番が行われた。

文政十一年 戊子 二十五歳

▲三月 名古屋東山に遊ぶ。

『よしなし言』三編(文政十一年執筆)に「岩躑躅の記三月辰東山行」として記されている。「筆のやのあるじ」にさそわれて出かけ、途中「杉江の貞一」をもさそうが、病につき同行せず。

○六月 雑著『おし花』三編一冊執筆。
引用書目等左の如し。

『五雑俎』『江戸砂子』浄瑠璃本『大友真鳥』『狂歌江戸砂子』
『隔簾花影』『還魂紙料』『西鶴織留』『放屁論』文政十年い
せおんど唐土ふね』『戯場訓蒙図彙』『湯嶋道之記』
本書四編一冊は年代の記載がないので、ここに合わせて掲載し
ておく。

『傾城禁短気』『町文飛脚賃銀定』『京師童謡』『如意君伝』『世
間胸算用』『山崎与次兵衛寿の門松』世『傾城質気』『世間娘容
気』『勝地吐懐編』『野傾旅葛籠』『八文字舎風読本目録(全
一二五部)』小説『阿波鳴門』

文政十二年 己丑 二十六歳

○六月 『色里新迎陵贅』一冊を書写する。

国会図書館蔵。奥に「色里新かりやうびん一冊文政十二年己丑
晩夏書早ナレドはしるしあるはふしをあやまりてうつせる也」
と朱書、続いて「此書年号はのせざれとも宝永享保のころのも
のなるべし元禄十四年のこと見たればさのみふるき物にてハな
し」と墨書。

○是月 雑著『おし花』五編一冊執筆。
引用書目等左の如し。

『当世恋慕水鏡』『嶋原大和暦』『役者口三味線』『役者一挺三
味線』『役者舞扇子』『男重宝記』『好色罌粟鹿子』院本『丹波
与作』『新薄雪物語』『春駒駅談』『好色兵揃』『真実伊勢物語』
『心中恋の魂り』『柳樽』七十七八九編『鶉権兵衛』さかいや

伊太八稽古本柳燕口』『絵本大人遊』『本居先生答問録』『浪花
なまり』『反物地合寛写』『江戸名所花暦』

○九月 雑著『おし花』六編一冊執筆。
引用書目等左の如し。

『骨董集』『関東名残の袂』『新編鎌倉志』『三足猿』『近世奇跡
考』『茶のさうし』『猫耳』『色紙の屏風』『色竹大全』
○十一月 雑著『おし花』七編一冊執筆。
引用書目等左の如し。

『大尺舞唄』『紅白菊蝶曲舞』『太泰牛祭祭文』『好色江戸紫』
『好色年男』『好色敗毒散』『京羽二重娘気質』お花『花楓都模
様』『源氏鬢鏡』『句兄弟』『けいせい色三味線』『新橋姫物
語』『風流友三味線』『今様傾城反魂香』『心中刃ハ氷の朔日』
『兼好法師物見車』『心中万年草』『なんば橋心中』『名陽旧
覧図誌』『源氏花鳥大全』

▲是歳以前文政七年以後、鈴木朗より『錦織廻文』『文七首』『左伝
説』『聊斎志異抄』の四部の図書を借りる。

「文莫」四号(昭和五十四年八月)所収の水野清氏「鈴木朗の
借書簿」による。

天保元年 庚寅 二十七歳

▲閏三月十三日「邯鄲」を題に茶番をする。

『よしなし言』四編による。「閏三月十三日真水(佐藤友直八
絃)開帳を題にする」「同日予は邯鄲をしたり」とある。

○是月 雑著『おし花』八編一冊執筆。
引用書目等左の如し

平由豆流校『牛祭祭文』『歌曲さらへかう』『倭文庫』『野良
開角力』前句附『若みどり』『続つれく草』『聊斎志異』
延賀戯作『おかけ参古今集』『後編穴穿鑿』『当世穴噺』『寛
活色羽二重』『男色小鑑』『好色智恵袋』『吉原大全』『色道大
鼓』『好色本』『栄花物語』『おかげぬけさんぐう』同別本『伊

勢講并参宮儀式』『遊女案文』『百人一出拭紙箱』『奉献上俳諧百韻／薬師如来御宝伝』『小野篁謠字尽』『事文類聚後集』

『曾呂里狂哥咄』
○六月十四日 『加納騒動之風聞』二十三丁を書写する。

京都大学図書館蔵。次条『買物かたり』と合綴。卷末に「文政十三年庚寅六月十四日 仙果書」と記す紙が添付されている。柱に「かし本」大野監と刻されている。

○是月二十日 『買物かたり』十八丁を書写する。

京都大学図書館蔵。前条『加納騒動之風聞』と合綴。卷末に「文政十三年庚寅林鐘廿日 仙果書」と記す紙が添付されている。

◎秋 滑稽本『同行百人一宿大土佐草』一冊刊。

本書はすでに年譜本編に掲載済みであるが、近時、明治刷りのあることを知った。跡見学園女子短大図書館蔵。版元が「東京書肆」「神田区佐久町／式丁目十番地／山田藤助」となっている。他は初版に同じ。

○十月一日 橋庵田鶴丸撰、狂歌『俳諧調千竈の郷』に三首入集。表紙に

橋庵老人師判

俳諧調千竈の郷

文政庚寅初冬朔

待請会主

熱田惣連

於酔雪楼上披講

とあり、口絵にも「仙果筆」とある。

菊

雨障子おほぬ菊や摘ませんあふらひかすのきさみたはこに

笠亭仙果

杜紅葉

やとり木のかへてハ赤き衣ませてはよそのもりの松はまよこか

仙果

寄海恋

新枕むねにたゞせし波も今海とあれたるひとりねの床

仙果

○是月上旬 『文政御蔭参之記』一冊を書写する。

国会図書館蔵。奥に「右一卷浜田孝国主所著也干時文政十三年庚寅冬十月上旬写之未經校合恐有魯魚之誤歟看人勿咎其杜撰高橋広道」とあり、この後に「御蔭参記考證略全」を付す。

※十二月二日 柳亭種彦、仙果宛に書簡を送る。

十二月二日付の書簡であるが、天保二年刊の『国字水滸伝』九編が十二月一日に発売になったこと文中にみえていおり、本年のものと思われる。右水滸伝のことや自分の病弱なことなどが記されている。『国字水滸伝』全二十編の出版経過については、佐藤悟氏『国字水滸伝』をめぐって（『国語と国文学』昭和五十六年九月）に詳しく、本書簡もそこに翻刻されている。

○是月 雑著『おし花』九編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『新吉原つね／＼草』『清俗紀聞』『心中大鑑』『古市色茶屋

名寄』『美景時絵松』『両巴厄言』『吉原見物左衛門』『石橋七

騎落』『道行揃』即 橋葉子増補手製集』『唐物語』『三廓盛衰記』

『兩廓相撲紋日』院本『塩屋文正物語』『井筒屋源六恋寒晒』

『曾我虎が磨』『大経師昔暦』『一心五界玉』『鍵の権三重帷子』

▲是歳 病氣静養中の春の屋を見舞い、もろこし団子を作って「豹」と題する口上を記して送る。

『よしなし言』四編による。「はるの屋当年二十五才にて寅のうまれ家名笹屋紋竹に花初名竹二郎竹葉軒といふ正月生まれゆゑとらのつきにてはるのやといふ」とあり、寅年生まれの人が二十五歳になるのは本年である。

○是歳以前文政年間 『熱田手毬歌』一冊を記す。

書題簽には「熱田毛毬歌益歌附」とあり、「熱田手毬歌」「熱田益歌」「熱田童謠」から成る。「笠亭仙菓」跋。益歌は古今園平

出順益の補。裏表紙見返しに「(細野)要齋写」「続学舎(小寺玉晃)叢書廿四載」と墨書されている。年代の記述がないが、右人々の名があることや、「仙菓」とあることから、恐らく文政年間の成立であろう。

◎同 『うさぎ大てがら』一冊刊。

表紙に「うさぎ大てがら」「仙菓作」とある。中本全六丁。見返しに「お月さまいくつ童謡をてがらはなしにませ合せてついでまるめた長生団子」とある。「今年の新板はるの長日のなぐさミにならずともして給へかし 厚田笠亭仙菓」序。巻末「笠亭仙菓作」「高国画図」。柱「うさぎ」。版元不明。年代の記述がないが、「種彦門人」の語が見えないことや、「厚田」とあることから、文政年間の名古屋版であろう。昭和五十四年十一月の東京古典会の入札下見の折に一見した。

天保二年

辛卯

二十八歳

※二月一日 柳亭種彦、仙菓宛に書簡を送る。

水滸伝の訳し方などが記されており、前掲佐藤悟氏論文では、本年八月六日に没した種彦の母と『国字水滸伝』十、十一編の草稿に関する記述があることから、本年の書簡とされる。

◎春 狂歌『春興立花集』一冊刊行され、仙菓の歌二首入集。

三世浅草庵春村の歌を巻頭に、松園梅明、竜の屋弘器、花山亭笑馬、七十三叟橋庵田鶴麻呂等の詠を収む。藤原可為画。巻末に「天保二辛卯年春日」とある。

ふ二の根ハ天の戸明てすめ神のはるを迎る門のもり砂

、(尾アツミ)笠亭仙菓

久かたの春をむかへて落水にむすひあけたる朝つゝの影

、(ナヨセ)高橋仙果

○四月十八日 木や七兵衛板『道外和田酒盛』一冊を書写し校を終える。

岩瀬文庫蔵。扉見返しに墨筆にて「わたさかもりハ寛文四年刊

行山本九左衛門板にて六段ものまったこのだらうけわたと同じ文にてをかしミをとりたるばかり也いつれ寛文前後のものなるへしふるき俗語をおほくましへたればたゞのわたさかもりよりはをかしくおもしろきものなり 仙菓云」とあり、奥には朱筆で「天保二年四月中旬うつす但し原本ハ文字少くかなはかりにしていたつての細字也中本片かわ十六行一行四十五字ばかりさし画七枚あり」、また墨筆で「十八日校早朱点ハ本書一行ヅムノシルシすべてもじハ原書と大にたがへてうつせり」とある。

○十一月 雑著『おし花』十編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『宗長紀行』、『雑名物浪花のながめ』、『江戸名所記』、『故郷帰りの江戸噺』、『女用訓蒙図彙』、『和田酒盛』、『庚子道の記』、『青楼画本年中行事』、『江戸惣鹿子』、『続江戸砂子』、『はなひぐさ大全』、『本朝校陰比事』、『百物語』

天保三年

壬辰

二十九歳

○二月十八日 山本六兵衛板『遊女誠草』一冊を書写し、校を終える。国会図書館蔵。奥に「右遊女誠草画二二丁文六丁半片葉十三行子のべて十丁半とす 天保三年二月十四日仙菓 但し画はうつさず曲節細字ことに版つかれてミえかたき所おほきをあらうくにつけたれハ大にたがふべし 同十八日夜校合早」と墨書されている。

○三月 雑著『おし花』十一編一冊執筆。

引用書目左の如し。

『風流無尺書物語』、『大江戸てまり哥』、『江戸盆哥』、『寒川入道筆記』、『盃雛形』、『近年の事のミにて独吟哥仙(種彦)』、『父の恩』、『諺の字』、『柳亭翁藏土佐ふしの本目録』、『足薪翁百露』、『舞曲扇林』、『色竹初心集』、『おほ三さかり流行小うた』、『清十郎五十年忌』、『和国風流兄弟鑑』、『水木辰之助鏡振舞』、『関東小六今様姿』、『伊勢御遷宮』、『姫蔵大黒柱』、『五穀長者枿掛筋』、『とりべ山』

心中』『焚天国宝船』『寛政女景政・問答』『傾城彦長染』『寛政春曾我』『けいせい千尋海』『けいせい宝の山』『里見八大伝八編の誤正』『夏祭浪花鑑』『拳独稽古』

◎春

合巻『花街雀竹夜遊』前帙刊。

右の改題本を向井信夫氏よりお見せいただいたので左に記す。上下各十丁。上の表紙には「伽羅先代萩」とあり、巻末には「国真画」「柳亭校合」「仙果作」と見えている。下は表紙を二世立川焉馬の合巻『戯場稿本当現建』二編（天保二年刊）のものを使っている。巻末は上と同内容。柱が「里すゞめ」となっていることから、右の『花街雀竹夜遊』の改題本ということになる。

○七月二十六日 『江戸節根元集』一冊を書写する。

岩瀬文庫蔵。奥に朱筆で「江戸節根元集一卷柳亭翁所蔵也甚悪本にて文字よみがたく衍文欠字いと／＼おほくもじのあやまり数もしらずもと拙文なるにかゝるわるうつし故意の解しかたき所すくなくからねども江戸ぶしの事いとくはしければうつし置なりしかしよにまれなる書なれば珍重すへきものなり 天保三年たつのあき文月廿六日 せんくわ」とある。

▲十二月三日 鈴木朗より養生の道についての話を聞く。

『よしなし言』四編による。「天保三年十二月三日離屋のたまはく」として、「味噌でのおむい盃酒に毒はなしすゝけたかゝに酌をとらせてくたひれてやすむがほんの休むにてうすきしなれてや風ひかぬもの」という朗の口伝などを紹介している。朗の養生論については、安政六年執筆の『雅俗随筆』『長寿の老媪』の条でも、その著『養生要論』を「貝原先生の養生訓などゝは格別の教」と評している。

▲是歳又は一兩年前 一本屋の依頼によって『自来也物語』を鈔録しようとしたが師種彦に制せられてとりやめる。

『雪梅芳譚犬の草紙』三十二編序（安政元年刊）に「下三十

未満の頃一書買感和亭の自来也物語を鈔録せよとあつらへられしを故翁無益骨折也とて制せられければ辭て筆を採ずなりき」とある。三十歳未満であることと種彦との関係を考えれば、このことがあったのは本年を遡ること数年のうちのことであろう。

▲是歳の頃 先妻との間に長女誕生する。

天保十四年十二月二十四日後妻が没した時、「自叙伝」によれば右長女は十余歳であったという。この時の年令を仮に十二歳とすれば本年の出生である。この娘と同居している時に書かれた『なるの日並』（安政二年十月二日執筆）と、天保十三年三月に江戸へ出た折の記録『おもひのまゝの日記補遺』に見える家族への土産物表とを比較すると、「ぎり」という名のみが共通する。この娘その人のことであろう。右の土産物表に「きりに 湯もとさいくくわしたんす一ツ」とある。なお、その隣に「たねに 同じくつちひとつ、ふたりもやひにて家具一二入のはこ一つ内にいろ／＼」とある。「たね」とは、天保十二年に後妻との間に生まれた娘の名であろうか。

天保四年 癸巳 三十歳

○三月七日 桜の花をめぐる友人との座興を「はなかめの日記」として草す。

『笠亭仙果文集』所収。まず二月二十三日に「和松（俗称琴二）」と二人で正光院の花を見る。三月一日に「久目の倚松」より桜の枝を送られるが七日になっても色あせぬので、この日右二人を呼んで茶番を計画するが、ふとしたことで瓶花共に砕き散らしてしまふ。そこで出かけてきた二人とともに、机上の筆を並べて筏の様に見立て、空想の世界に遊ぶ。終りに「天保四とせといふとしのやよひ七日、さくら見しけふのひと日のたはむれを七世のうちにきゝてわらはむ」と詠んで結んでいる。

○四月はじめ頃 雑著『おし花』十二編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『西鶴置土産』『劬惜五穀字紙啓』『俳諧二十全集』『金龍山』
『なぞつくし』はんしもの『なそのほん』かわり』『心中よ
みうり』『神路の事ふれ』『あはせ鏡』『浦島年代記』『八百屋
お七』『鶴尾冠』『はらすぢ草』『女郎花物語』『続近世崎人
伝』『新色五巻書』『百人女郎』『世話重宝記』『四民童子字尽
安見』『芭蕉七部集』『源氏拾遺』

○是月十七日 鈴木朗が置き忘れていった『源氏拾遺』を書写し終
える。

『おし花』十二編による。「天保四とせといふとしようつき十四
日のひ離屋の翁この書をもてきておきわすれてかへりたまひし
のち夜毎にうつしつゝけふ十七日のひつしのきささまでにうつ
しとりつ 高橋仙果しるす」とある。

○是月中旬 雑著『おし花』十三編一冊執筆。
引用書目等左の如し。

『犬子集』『膝栗毛の内の俚歌』(内遠作) さき草『錦裏』
『傾城買二筋道』『傾城買談客物語』『歌祭文』『茶傾腹立顔』
『分里艶行脚』『役者色仕組』『引鳳簫』『傾城三國志』『乙矢
集』『俳諧次韻』『俳諧埋木』『洛陽集』『錢別五百韻』

▲五月二十五日 この頃熱田の友人に「松」の字を使った号が流行
し、仙果も「松羅」と号すことにし、そのことを佐藤琴松に告げ
やる。

『よしなし言』五編による。終りに「まとはん松このしまの
松の場まミとりの松や琴ひく松に 天保四年五月二十五日」とあ
る。前条の「倚松」は久米吉一郎、右の佐藤琴松は琴二ともい
い、俗称益三トスダ、真水のこと、前述の「和松」その人である。

○十一月下旬 平出順益著小寺玉晁画戯文『乞児奇伝』に序を記す。
右の書をかつて翻刻したことはすでに年譜本編に記したが、そ
の折に所蔵者を京都大学図書館のみと記したが、国会図書館に

も『乞児奇伝』として写本一冊が所蔵されており、また早稲田
大学図書館蔵玉晁叢書の中の『八頭愚冥迷奇伝』にも序跋のみ
であるが記されている。

○是歳 紀行『いしや物語』一冊執筆。

未見。雑賀重良氏『尾三歌書年表』による。仙果自筆本を三村
清三郎氏が所蔵していたという。

天保五年 甲午 三十一歳

○元日 雑著『おし花』十四編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『望前千句』『正章千句』『新統独吟集』菱川画『床之置物』
『女中野良話』『鳥追歌抄』『談林鳳百韻』『新撰抜粹抄』『崑
山土塵集』『牛刀毎公編』『玉海集』『毛吹草』『謡本』『辰巳
婦言』『玉櫛笥』

○正月十日 『玉箒日記』一冊執筆。

未見。「ほんや」第一巻五号(大正四年十月)所収、牽舟氏「家
藏名家自筆本の一部」に『奇異実録』(元治元年頃成立)に続
いて次の如くある。

玉箒日記 一冊 同じく仙果の自筆にして、表紙に
天保五年といふとし十日の日
はつねのけふの玉箒日記
同好はなし入

古今堂千歌漫筆

とあり、この年正月九日友人松洲の許にて同好会合して戯れ
しことを記す。

○是月 人情本『梅香情史鶯袖』三巻三冊刊。

年譜本編では、所見本に年代の記載がなかったため、『訂日本
小説書目年表』によって本年「是歳」の項に掲載したが、佐藤
悟氏服部仁氏の御教示により本年正月刊と改める。両氏所蔵本
の序文末に「天保癸巳同甲午孟臘著述 笠亭仙果」とある。内題「梅香鶯袖」。

○二月 熱田神宮の司家の依頼で狂文一篇を記す。

『よしなし言』五編による。「大宮司家より沖田どのの母君なるか七十賀にめてたき狂文かけ画もともにかけと命せられてかきてまゐらせける狂文一篇」として記載されている。画については「画には春駒のあそびと鹿のつのをかけり馬鹿のなぞく」との説明のみを付している。文末に「天保五年甲午春二月」とある。

※春 柳亭種彦、『俳諧雑巾』下巻を仙果所蔵本によって書写する。

佐藤悟氏の御教示による。東京大学図書館竹冷文庫蔵。一冊本で上巻は板本下巻が種彦の書写である。表紙見返しに「雑巾集^{上発句} / 下ノ巻ヲ闕天保甲午春ノ厚田仙果ノ蔵書ヲ以補フノ^{下附合} 柳亭種彦」と墨書されている。

○五月二十一日 雑著『おし花』十五編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『俳諧中庸姿』『俳諧統独吟集』『^並住吉御田植』『小倉附』
『^{前句}へらざ口』『^熱雑宮物語』『俳書(名欠)』『^{坂雪}千句』『軍
法富士見西行』『かたこと』『まさきのかづら』『尾陽発句帳』
『西翁十百韻』『山水独吟千句』『賦獅選』『万歳』『宝貨通用
事略』『柳庵随筆』

なお本書十六編は所在不明。

天保六年

乙未

三十二歳

◎正月 『俳優三十六花撰』の柳亭種彦の序文を代筆するか。

本書香蝶楼歌川国貞画(本文中には北溪の画もあり)、文栄堂上梓。司馬園老人の跋文を付す。序文は「天保六年未正月 柳亭種彦」となっているが、これと全く同文が『笠亭仙果文集』に取められている。右序文の年次が刊行時ではなく執筆の年次であるならば、仙果は本年春(月は不明)には江戸に出てきていることから、さらには墨付八十一丁ある『笠亭仙果文集』の中で仙果以外の人の文章は最後の一丁のみであることから、仙果が

代筆している可能性がないでもない。天保六年といえは、潤筆料問題や仙果戯作における種彦の校閲が問題となる年でもあるので、少し長いが序文全文を左に引用しておく(仙果らしきことを思わせる部分には傍点を付しておいた)。

俳優三十六花撰叙

越後鮭は四斗樽に洗濯して簾を腹へ張、伊勢海老は青竹を針に削りて継あてがひに髭を綴る、牛房は藁にて袴を仕立、半切は赤い帯して鼠も少見よげなり、羽子板は美濃紙に衣紋を作れば、破麗弓は紅絹の裂にて鉢巻をなすめり、橙子も笄をさし、飾梯も温鈍の粉の白粉して、非情さへも春をまつ粧ひのせわしなさ、まして人間はそれく暇なく、慰斗目の腰の横霞は火斗の陽炎にもえいで、地無小袖の梅花の薫りは、伏籠の室より咲出けん、羽二重のしなやかなる、諸麻のこは強しきも、陸月の曠と裁絶つ、家居も常よりは清らに払ひ、障子は白く疊は青く、稲生の鳥居板塀の、塗なほしでま調ひしは、彼貫之が今一色、五色に足ぬと書しに似たれど、実大江戸の難有さは、押鮎の口をたづねず、海の物山の物、居ながら自由が樽のくち、四角にあけて餅を詰、吞ずなりぬと元旦の、屠蘇酒を忘れまいぞと、下戸の身に相応な、昆布珍芋し物、かうやうの節の膳を、喰をはりて突いたし、原来庵の狭ければ、払除するに骨もをれず、正月着の用意もなければ、紺屋へ催促の世話もなし、嗚呼貧樂とは、是をこそいふならめと、熟浮世を罫子の蓋、取て手づから汲いだす、福茶も煎じつまりたる、大晦日の夕くれ方、松をくぶって竹町に、程遠からぬ四谷の書房、案内をこうて入来り、懐より出しははや彫なりし一冊なり、組蓬菜をかざりながら、取あげて何ぞ見れば、渡雲が銚たる慰斗目鎮、亀戸の筆にして、今三座に盛りを競ふ、花を撰んで第一に、まづ木場の鯉を出し、鱗の数の三十六人、是に自筆の発句を集め、画題になすとの物がたり、未それをば見ざれども、一夜明れば

新玉の、玉を連ねし言の葉なるへし手机を拍て曰、妙でんす兆殿司、昔の画工はいざ知らず、其身其儘出られたやうに、画れしは誰ござらうぞ、歌川の歌の字は、則歌仙の歌の字でござい、定家卿の正本に、歌は詠ことの難きにあらず、よく詠ことの難きなり、似顔絵も又然り、目を大きく鼻を高く、何某と見ゆる程には土蔵の壁にも現るれど、よく似ることの難きところを、習ひうかめし画の妙義、初卯飯りに国貞子を、明なは訪んといひければ、その時本屋膝をすゝめ、まづ讚詞は後にして、直に此序を書よといふ、其きつかけに弓張提燈、腰の矢立を打つがへ、とつた／＼と込める掛乞此大話をきり抜て、松すぎには稿本をわたすべしと断れども、更に耳にも聞かれず、側の重話を、指示して予にいへらく、座禪豆のからびたる鯨飾の生漬なる誰人かそれを喰者あらん、絵本の叙文も其如し、読者はなけれども、塞ひでおくが吉例なり、抑牛房のたゞきなぐり、どうでもよいと猶免さず、実々彼かいふに違はず、節料理と不文とは、別に替りし曲もなし、鯨飾の埜にて、ちよいと色を付ておけば、夫で祝儀はすむことと、頓筆を把あけつ、彼絵草紙を繰かへせば、はや春めきし白酒壳、着付は橋外良は、代々続きし鯨の羽織、これは小田原神馬澡三升は組入慰斗菱も、福包の形と見なされ、師匠から樺の、画人の印の年の字さへ、輪飾のやうに思はれ、鳳尾草の蠅虫の、飛だ事から時分がらの、物にばかり目がついて、序文らしき趣向も浮まず、とかくなす間に鶏もうたひ、東のしらむに驚かれ、唯其夜の有のまゝを礼帳の横綴へ筆にまかせて杜若、其定紋の扇々の、声に全く明はなれおもはず吉書となりしもをかし

天保六年未正月

柳亭種彦

▲春 二度目の江戸旅行をする。

このことは年譜本編にすでに記したが、天保七年二月三十日付の仙果宛種彦書簡に「又々当春も御出のよし鶴屋にて去年の御

病気に心配いたしそのうへ当時殊の外とこみ御座候て当年は御世話いたしかね候段断りに御座候」とあることから、この時は江戸表では鶴屋喜右衛門の世話になり、かつ滞在中に病気がなつたことが知られる。

天保七年 丙申 三十三歳

○正月 雑著『おし花』十七編一冊執筆。
引用書目等左の如し。

『好色入子枕』『神都長嶺記』『手まり哥』評判朱雀遠目鏡
『東海道名所記』『諸国安見廻文之絵図』『木やり本』会時軒合
次郎五百韻』『(古写本)併諧集』『廻文之誹諧』『清十郎歌諧』
『東路塩土伝』『煙霞綺談』『武家禁秘録』『塩尻』『秘伝世宝袋』
なお本書十八編は所在不明。

※二月三十日 柳亭種彦、仙果に書簡を送る。

「集古」乙丑第五号所収。当春は仙果の上京に際して鶴屋が世話をしかねると言っていることや、種彦の転宅などについて記されている。

◎春 合巻『国字水滸伝』十四編刊。

本書全二十編については、鈴木重三氏と向井信夫氏より、それぞれの御所蔵本をお見せいただいた。本編は表紙に「丙申春」とあり、見返しには「笠亭仙果訳」「申春新刻」とある。「天保六年仲夏脱稿 種彦門人仙果」序、国芳画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。
本編には種彦の校閲がなく、また刷付表紙には本文に関係のない美人二人が配してあるが、表紙のみを従来の編と同様唐本風に仕立てかえて、翌年正月に再度刊行されている。

▲四月 三度目の江戸旅行をする。

本年二月三十日付の仙果宛種彦書簡には「又々当春も御出のよし」とあるが、『よしなし言』六編所収の一文に「……去冬三五首よみ試し置しをし今しも東旅に物して大堰川に水出てわたられねばすべく西坂の駅升屋某が家にやどりゐたる長日の徒然

に追次によりみ出つゝ遂に百首に充しめて……天保七年丙申四月廿一日 笠亭仙果識」とある。四月になって熱田を出立したものとと思われる。なお、年譜本編においては、仙果の江戸行きを全六回と考えていたが、今回の一回を加えて全七回と訂正する。

▲五月二十八日 新吉原文字樓方に集う。

『よしなし言』七編による。集まった人々の名は記されていないが、「松広」なる男が途中で女性に会いにぬけたので、戯れにその男の妻の名を借りて恨みの手紙を書き、その男のもとへ届けさせている。

○六月上旬 雑著『おし花』十九編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『本朝文粹』『武江被砂』『瀨太問答』『日観要放』『逸史』『庚子道の記』『当世軽口咄揃』『(異本)職人歌合』『和漢三才図会』『本草綱目』『艶詞史林残花』『南花余芳』『好古小録』『風流足分船』

○十月 『鶯袖』二編の序を記す。

『よしなし言』七編による。『鶯袖』は天保五年正月刊行『梅香情史鶯袖』のことであろう。三巻三冊の初編に続いて二編を出す予定であったのだから、刊否未詳。本作は「笠亭仙果 関」とのみあって作者名を記さぬが、本二編序には「此書初編を著述たりしは先春堂某とてかゝる書作人ならねど一時の戯筆を予に託して名を銘させて書肆に与へつ」とある。末に「干時天保七年十月」とある。

天保八年 丁酉 三十四歳

◎正月 前年春刊行の合巻『国字水滸伝』十四編再刊。

見返しに「丁酉孟春」とある。柳亭校、仙果訳、国芳画。「天保六年仲夏脱稿 種彦門人仙果」序。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。

※四月 小寺玉晃、仙果を通じて種彦蔵『淋敷座之慰』一冊を借りて書写する。

早稲田大学図書館蔵玉晃叢書のうち。奥に「此淋敷座之慰ハ東都柳亭種彦大人の蔵なりしを友人仙果子借来りしを同友一桂堂主人と予と一部つゝ写しなり 天保八丁酉初夏 続学舎玉晃」とある。玉晃は種彦本にあってと思われる式亭三馬と種彦の識語をも巻頭に写しているの左に記しておく。

自寛永はやり小うた

自延宝四年至文化十二年及／百四十年古写本可愛玩今茲

／乙亥三月上浣令春高千補／表装所蔵也／式亭主人

此さうしは三馬の蔵なり友人山口柳塙／書写して蜀山翁の蔵となす今は又豊介の／文庫にありそれを他にあつらへて写させたれば／原本より三転なり誤りもあらん歎／天保癸巳十月

念六校早 柳亭種彦

※是歳以前 名古屋にて一枚摺の「金府繁栄風流選」が刊行され、仙果の名も出る。

逢左文庫蔵『鶏肋集』の中に添付されている。わく外に「金□堂蔵板三千葉配進不許翻刻売買」とある。「芸能長者」の部に「戯作 厚田仙果」とある。「文雅遊客」の部に「博識 離屋老翁」と見えていることから、鈴木朗七十四歳で没する本年以前の刊行で、恐らくは文政末から天保初めにかけての板行であろう。他にも「筆勢 森高雅」「皇国(植松)茂岳大人」「興歌 龍屋大人」「書林 永楽屋」「貸本 圃大惣」など見えている。

天保九年 戊戌 三十五歳

◎九月 黒川春村撰狂歌『淡海名寄』前編(初編)一冊が刊行され、仙果の狂歌五首入集。

序に「大江戸のあさくさ人草の屋の春村天保九年九月九日きくのさかつきとりかへすけふのしるしに酔人めかしてしとけなきことゝもをかくなん」とある。巻末には「天保九年戊戌九月刻成 近江日野浅稻庵蔵板」。

老曾

ほととぎす夏たけぬともをちかへり声なおいその杜のわたりハ

熱田広道

辛崎

また罪をつくるかあまハミそきするけふから崎にあうをおくし

熱田広道

志賀

しかの山古きミヤこの花さかりいつらミはしのもとこの桜は

熱田広道

かへる雁こゝもふるさと立とまりしハシミてゆけしかの花園

熱田広道

さくらさくしかのうらわに舟よせん八十ミなどもおもひたとら

同

◎是歳 合巻『国字水滸伝』十五編刊。

下巻表紙に「天保戌新刊」とある。笠亭仙果訳、国芳画。「天保九年戌正月 笠亭仙果」序。永寿堂西村与八板。なお上巻見返しに「柳亭種彦訳」とあるが、表紙は「笠亭仙果訳」となっている。

天保十年 己亥 三十六歳

◎正月 合巻『国字水滸伝』十六編刊。

上巻見返しに「栗亭仙果訳」とあり、下巻見返しには「己亥の新春発布」とある。「天保十年己亥新刻 笠亭仙果」序、国芳画。松寿堂大黒屋平吉板。

○是歳 『仙果点俳諧帖』（仮題）一冊成立。

東京大学図書館酒竹文庫蔵。本文中には蔵書印も含めて手掛りになるものは全くなく、書名も全く記されていない。表紙に

「仙果点 天保十」と記された付箋があるのみ。

天保十一年 庚子 三十七歳

○春 便々居琵琶彦に対抗して鼠の狂文を草す。

『よしなし言』八編による。「便々居ひは彦子の春鼠の狂文かきたるが和漢の故事雅俗の縁語百余数も引出してほこりけるを例のまけし魂にてそれにもれたる事のみにてつくりたる鼠の狂文」として記されている。

天保十二年 辛丑 三十八歳

○二月 雑著『おし花』二十編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『女重宝記大成』『袋草紙』『独語』『三余雑芸』『水鏡』『題画詩刪』『松坡軒鈔録』『桜品』『江談抄』『大和物語』『料理通』

本書二十一編は所在不明。

○夏頃 『尚古雑摸』一冊執筆。

国会図書館蔵。『人倫訓蒙図彙』や『絵巻物通覽』（東大寺正倉院宝物等の絵図）等の抜書きで、『みやこ鈴なるこの神徳』の後に「此書天保十二丑年夏写之右躍の中へ公家衆も交わりておとり大内へも這入おとりたりといふ凡京中に緋ちりめんもミの切類ミな売されたりといふ」とある。

○八月 狂歌『二藍源氏』一冊が刊行され、仙果の狂歌二首入集。

巻末に「天保十二年八月刻成 千束庵蔵」とある。浅草庵春村撰の部に

（逢恋）

あふといへハ秋のよたにもミしかきをことそともなき色の下ふし

熱田広道

また千束庵章雄撰の部に

（春月）

みなせ川おほるにうつる月かけハ霞の下やかよひゆくらん

熱田広道

他に拍陰社広善撰の部があるが、そこには仙果の詠は見えない。

天保十三年 壬寅 三十九歳

◎正月 合巻『国字水滸伝』十七編刊。

上巻見返しに「栗亭仙果訳」とあり、下巻見返しには「壬寅初春」とある。「壬寅初春 笠亭仙果」序。国芳画、松寿堂大黒屋平吉板。なお十八編以下完結する二十編までは松亭金水訳。
※七月以前 柳亭種彦、『よだれかけ』六卷六冊の足らぬ所を仙果に補わせる。

江本裕氏の御教示による。年代の記載がないので、種彦没する当月以前として掲げる。本書故江戸川乱歩（現平井隆太郎氏）所蔵。巻四までは『よだれかけ』と改題本『たから箱』の取りあわせで、巻五は写本、巻六は『よだれかけ』である。巻一表紙見返しに左の如くあるという。

このよたれかけ四の巻までは／慶安二年の著なり／五・六の二巻は承応元年若衆かぶき／法度になりしのち／承応二年に書つぎしなり／序跋に寛文の年号あるは後年に彫り／いれしものなるべし／又再元禄九年△江流の序関別に序を加へ五・六の巻をのぞき四の巻まで以たから箱と外題をかへたる本あり／それかれの関本を合せなほたらざるところをば仙果にあつらへさせて補ひをはんぬ／柳亭翁

○九月 雑著『よしなし言』十編一冊執筆

表紙に「天保十三年なかつきより」と墨書。

天保十四年 癸卯

四十歳

○八月十四日 『万葉集作主履歴』九卷五冊を書写する。

天理図書館蔵。奥に朱筆で「天保十四年卯南呂十四日写畢 高橋広道／原本ハ浅草庵薄斎翁蔵一二三ハ少シ宜シキ本ニテ四ヨリ九迄甚／誤脱多キ悪本也ヲリフシ梅居ガ蔵本ヲ借テ参見スルニコレモアヤ／マリハアレド大カタハ宜シゲナレバ其ヨシト思フカギリ／ヲ本文ヘマジヘ出シツイ本トアルモコレナリ但シ／イ本ニハアラズ写シノヨキ也」とある。

○九月 雑著『おし花』二十二編一冊執筆。

引用書目等左の如し。

『うつほ物語』『新撰和歌』『世話千字文』『続神皇正統記』『裏見寒話』『北山殿行幸記』『本朝文粹』『柳庵隨筆』『古梅園墨譜』『玉かつま』『北窓瑣談』

本書二十三編より二十七編までは、編数不明の一冊（嘉永六年秋執筆）以外所在不明。

付記 今回、早稲田大学図書館の御許しにより、仙果及び

その友人知人の像（次頁参照）を掲載することができた。記してここに御礼申し上げます。

（昭57・12・2）

小寺玉晁『人物図会』(手稿本)

(早稲田大学図書館蔵)



〔小寺玉晁〕

〔平出順益〕

〔永坂周二(一桂堂)〕



〔榎園秋津(本居内遠)〕



〔松尾屋新兵衛(千瑜)〕

〔高橋広道〕